

2007 年度 川と山のぎふ自然体験活動の集い 報告書



2007 年度子どもゆめ基金助成事業

2007 年度 川と山のぎふ自然体験活動の集い

ご挨拶

2005 年 3 月に県内の自然体験活動を行なう団体や指導者が県立森林文化アカデミーに集合して始まったこの『川と山のぎふ自然体験活動の集い』も今年で 4 回目を迎えます。

今回は西濃地方で開催のはこびになりました。そしてボランティアもしくはそれに近い形で自然体験活動を推進する方々にもぜひ参加いただき、岐阜県の自然体験活動の今後を探ることをサブテーマにしてみました。

自然体験活動に携わる多くの方々との交流で、子どもたちや皆様の自然体験活動が一層充実したものになりたいと願ってやみません。

サブタイトル(キーワード)

- ・ 自然体験活動これまでの 10 年、これからの 10 年
- ・ 西濃の草の根自然体験活動からみえたもの

主催 川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会

日時 12月8日(土)～9日(日)

場所 岐阜県立関ヶ原青少年自然の家 岐阜県不破郡関ヶ原町今須字平ヶ谷3581

参加料 1,000円

そのほかに交流会1,000円(参加者のみ)、岐阜県立関ヶ原青少年自然の家規定の諸料金

関ヶ原青少年の家料金表			
項目	金額	25歳以下	25歳以上
宿泊料		470円	740円
朝食	472円		
昼食	577円		
夕食	683円		
リネン代	165円		

持ち物 上履き・防寒具・マイカップ・タオル・歯ブラシ他洗面用具一式・筆記具・健康保険証(写し可)

その他 ポスター等の展示セッション・団体活動紹介あり

川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会

川尻 秀樹(森林インストラクター岐阜)

北川 健司(エヌエスネット)

窪田 一仁(どんぐりの森実行委員会)

柴田 甫彦(長良川環境レンジャー)

佃 正壽(森林たくみ塾)

中澤 朋代(松本大学)

三島 真(山と川の学校)

八尾 哲史(岐阜県立森林文化アカデミー)

(アイウエオ順)

日 程 表

日付	時間						備考
第1日目	9:00	エクスカーション受付(現地)					現地集合
	12:00	受付(岐阜県立関ヶ原青少年の家)					
	13:00	昼食					
	14:00	開会式・オリエンテーション					
	30	基調テーマ『これまでの10年、これからの10年』共有の為のスピーチ 担当 田村 明(朝日大学)					
	40	エクスカーションレポート					
	15:00	ポータルサイト構築に向けて	見つめる・見直す岐阜の水と森①	気まぐれナバの、ちょっとだけインタープリテーション	自然体験基礎講座「アイスブレーキング入門」		
	16:00						
	17:00						
	18:00	夕食					
19:00	基調テーマディスカッション(自由参加)						
20:00	団体紹介&交流会						
21:00	アダルト禁止学生だけの集い						
第2日目	8:00	朝食					
	9:00	今頃の森づくりから学ぶ	見つめる・見直す岐阜の水と森-パート2-	自然体験基礎講座「身近な自然見直しプログラム作り」	自然体験は地域に役立つ!(プロもアマも一緒に考えよう)	ネイチャークラフト入門	
	10:00						
	11:00						
	12:00	昼食					
	13:00	全体会					
	14:00	閉会式					
	30						
15:00	解散						

事業内容

◎エクスカージョン

	概要	担当
ハリコネットワーク(池田町)	<p>中濃地域の湧水地に生息するカワセミや多くのカモ類の観察と、ハリヨ(トゲウオ)などの生き物と保護活動を見ます。</p> <p>公共機関ご利用の方は養老鉄道養老線揖斐行き電車(大人 350 円)で、大垣発 8:44 北池野駅着 9:04 をご利用ください。駅までお迎えに行きます。</p>	窪田 一仁 (日本野鳥の会西濃支部)
<p>水と地域の歴史 (大垣市輪中館周辺)</p> <p>★ 集合時間 8日9時</p> <p>★ 集合場所 養老鉄道養老線友江駅 輪中館 (大垣市入方2丁目1161番地1)</p>	<p>かつての水の都大垣は戦後の低湿地開発により三面張りの『溝の都』に変わってしまいました。人間にとって都合の良いことは、他の生物にとってどうだったのでしょうか？</p> <p>それはさておき、治水から見た西濃地方の歴史・文化を考える場を提供します。</p>	浅野 純一 (エヌエスネット)
<p>関が原合戦を歩く(関ヶ原町)</p> <p>★ 集合時間 8日9時</p> <p>★ 集合場所 JR関ヶ原駅前</p>	<p>関が原は古戦場でもありますが、東西の交通の要所であり不破の関所や歴史的な場所も多くあります。この分科会では JR 関が原駅から徒歩で会場まで歩いて各所を巡ります。</p> <p>宿泊の荷物などは荷物車両を用意します。案内は地元の郷土史家を予定しています。</p>	北川 健司 (エヌエスネット)

◎ 基調テーマ ～これまでの10年、これからの10年共有の為のスピーチ～

概要	<p>いま私は美しい清流の流れに魅せられています。</p> <p>この川は自然を愛する人達によって大切に育てられ宝石の様に見えます。</p> <p>でも、この川の美しさを知っているのはほんの一握りの人達だけです.....</p> <p>この現状と今までの足跡を見つめ直し、私達と岐阜の未来について語り合いたいです。</p>
担当	田村 明(朝日大学教授)

◎ 分科会1

1. ポータルサイト構築に向けて

概要	<p>岐阜県下の自然体験を検索できるポータルサイト構築を目指しています。自然体験のできる宿や案内人、施設をだれもが手軽の便利に探せるポータルサイトで岐阜県下の自然体験がより活発になること考えます。この分科会では、岐阜県のポータルサイトに立ち上げた試行版もとに今後の具体的な進め方を話し合います。</p> <p>1人案内人からリゾート施設、体験施設、アウトドア会社、宿泊業の方などぜひ参加ください。</p>
担当	北川 健司(特定非営利活動法人エヌエスネット)

2. 見つめる・見直す岐阜の水と森1

概要	自然体験活動はよりよい暮らしや環境を目指し、広げ続けてきた活動。今年は長期にわたり岐阜の自然と関わり続けてきた二人のゲストを迎え、川と森の過去と現状、課題をていじし、翌日にはみなで今後は語ります。今一度原点となる自然環境を見つめなおしてみましょう。
担当	成瀬富士一(揖斐川町役場揖斐川水源地域ビジョン推進室)／柴田 甫彦(環境市民ネットワークぎふ)
ファシリテーター	中澤 朋代(松本大学)

3. 気まぐれナバの、ちょっとだけインタープリテーション

概要	自然解説をする皆さん、せっかくのネタを無駄遣いしていませんか？この分科会では、インタープリテーションという手法を、お散歩体験しながら、野外で面白いネタを見つけ、より効果的に伝える方法をあ〜だこ〜だと皆で一緒に考えていきます。未経験者大歓迎！
担当	ナバこと、萩原 裕作(はぎわらゆうさく) (岐阜県立森林文化アカデミー講師)

4. 自然体験基礎講座「アイスブレイキング入門」

概要	アイスブレイクの“ネタ”持ち寄りパーティ！楽しい活動になるかどうか左右すると言っても過言ではないアイスブレイク(導入の活動)。「これは効いた！」「こればコケた！」という経験を持ち寄り、まずはやってみて、そして考えて…で進めます。また、「こんな時、どうしたらいい？」という日頃の疑問・質問も大歓迎です。新しいネタを仕入れに来てください。 希望定員:16~20名(偶数に)
担当	十文字 美世子(コミュニティワーク・オフィスこうらぼ/NPO 法人こうじびら山の家副代表理事)

◎ 事例発表・団体紹介(1時間)

岐阜県内外の活動団体や自然体験にかかわる会議の内容・予定を発表する。各団体の持ち時間は15分。

◎ 分科会2

1. 今須の森づくりから学ぶ

概要	この分科会では全国的に有名な今須択伐林を支えた林業技術を今に伝承する第一人者、山本晃治さんをメインゲストに迎えて、枝打ち職人の目から見た林業を見つめます。 なお本分科会は参加者全員に「ぶり縄」による木登りを体験して頂く予定ですので、「体験せざるもの参加するべからず」です。
担当	川尻 秀樹(森林インストラクター)
ゲスト	山本 晃治

2. 見つめる・見直す岐阜の水と森Ⅱ

分科会1参照。

3. 自然体験基礎講座「身近な自然見直しプログラム作り」

概要	私たちが住んでいる近くの場所は、たとえどんな都会であっても、必ず自然が存在し、多くの生き物たちが息づいています。そんなどこにもある身近な自然を体験し、あなたの地域で使える自然体験プログラムを作ることで、環境教育施設のプログラムデザインノウハウや運営についても解説いたします。どうぞお楽しみに。
担当	
ゲスト	猪俣 寛(河川環境楽園 自然発見館)

4. 自然体験は地域に役立つ！（プロもアマも一緒に考えよう）

概要	大垣市で毎年開催しているドンダリの森実行委員会の活動事例を通して自然好きの人々の輪を広げていく方策を考えます。 願わくはプロとボランティアが役割分担をして地域の自然体験活動推進の指針とならんことを……。
担当	窪田 一仁(ドンダリの森実行委員会)／千葉(メタセコイアの森の仲間たち)

5. ネイチャークラフト入門 -「結び灯台」づくり-

概要	美しい森ときれいな水に恵まれた岐阜・西濃の地で、クラフトづくりを通して木のこと、森のことを一緒に考えてみませんか。今回は、奈良時代の細い3本の木を組み合わせただけの灯火具に挑戦します。是非ご参加ください。 希望定員 10名・参加費 800円(教材費)
担当	入江 鐵夫(行灯工房 代表)

◎ 全体会

2 日間の集いの成果を分科会コーディネイター、アクティビティ担当者中心にわかちあい、今後の方向を確認する。

司会：八尾 哲史(岐阜県立森林文化アカデミー)

活動報告

《 1 日 目 》

エクスカーション

◎「ハリコネットワーク」

場 所: 揖斐郡池田町八幡地区

ガイド: 田中(ハリコネットワーク)、
窪田一仁(日本野鳥の会西濃支部)
野鳥の会のみなさん

参加者: 27 人

時 間: 9:00~12:00

<報告>

はじめに、ハリヨの繁殖地を見学し、まず最初に「ハリコネットワーク」の田中さんからハリコについての基本的なお話をうかがいました。

・ハリヨは岐阜県の天然記念物。「ハリコ」は地域での愛称である

・生息域は岐阜県の西南濃と滋賀県のみ。環境庁指定の「絶滅の恐れのある地域個体群」になっている。

・主な生態は、湧水地でのみ繁殖する1年魚・繁殖時期5~6月・なわばりあり・婚姻色への変化があるなど。

続いて、「守る会」の竹中さんから、保護活動についてのお話をうかがいました。守る会の会員は現在、800名ほどで、おもに清掃活動(アオミドロの除去・ヘドロあげ作業)を年2回実施しているほか、水質浄化に取り組んだり(EM菌の使用、チョウセンゼリ(クレソン)の繁殖など)、生息調査をしたり(投網による捕獲調査、個体数・体長などを計測する)、保護につながる具体的行動をしたり(ザリガニの捕獲や池の上に網を設置するなど)と多面的な活動に取り組まれている様子を聞くことが出来ました。現在ハリヨは、全体で40万~50万匹いると推測されるが、湧水の減少や環境による水質の悪化のため年々住みにくくなってきている現状を憂えておられました。

実際にハリヨを見ることができましたが、まず、体長2~3センチのたくさんの群れに驚かされました。「水温が一定の湧水」という特殊な条件にしか住めず、また周りの環境に大きく左右されるというハリヨの生態を聞くにつけ、種の存続のためにこの地域の一層の保護活動の推進が必要であると感じました。

その後、中川でバードウォッチング(ハリヨ池の下流、杭瀬川合流地点まで)をし、カイツブリ、コガモ、ハシビロガモ等のカモ類、バン、モズ、アオジ、キビタキ等をみんなで見る事が出来ました。さらに、関が原への移動途中には窪田さんから「どんぐりの森」の活動地点での案内まで受けることが出来、非常に充実したエクスカーションでした。



◎「水と地域の歴史」

場 所: 輪中館・輪住生活館・釜笛地区・十六輪中

ガイド: 浅野純一(エヌエスネット)、

伊藤允人(水門川いきいきプロジェクト)

参加者: 3人

時 間: 9:00~11:40

目 的: 水の都「大垣」の文化に触れてもらうと同時に、水をめぐる争いや水との戦いの歴史にも触れてもらう。



<報告>

はじめに、大垣市の輪中館と輪中生活館を見学しました。

輪中館には、昭和の頃の大垣の姿を映した写真や郷土資料をはじめ、輪中に関する様々な資料や模型がありました。これらの資料を見ながら大垣出身の浅野さんや伊藤さんの話をうかがいました。

輪中地域の暮らしでは、普通の地域と違う点がいくつもあり(例えば、この地域の古い家は近くに必ず池があること)、参加者はそれらの話に聞き入っていました。とくに十六輪中や土手の高さの争い(水争い)の話は参加者に対し非常に大きなインパクトを与えていたようです。

続いて見学した輪中生活館は、この地域の家をそのまま利用した資料館でした。そのため、きれいに掃除されていながらも生活の香りがしました。館内には資料や伝統食のレプリカなどが置かれており、当時の生活の様子を伝えるものとなっていました。

その後、数台の車に乗りあわせて、昔からの輪中特有の家が多く残る釜笛地区と、水争いのあった十六輪中を実際に見学しました。

このエクスカージョンでは、教科書でしか見ることのできなかつた輪中地域の生活について知ることができました。しかも、ただ「知識」を得ただけでなく、水がありすぎて災害が起きるといふ過酷な生活条件の中でも知恵を絞って生活する人間のすごさを感じました。ここまでのものを感じることができた背景には、ガイドの浅野さんと伊藤さんの、ここで生きてきた実体験をもとにしたお話だったからではないでしょうか。

◎関ヶ原合戦を歩く

場 所: 関ヶ原町(関ヶ原町歴史民俗資料館、関ヶ原合戦の場所、不破関資料館、句碑など)

ガイド: 高木優榮(関ヶ原歴史民俗資料館館長)、

北川健司(エヌエスネット)

参加者: 15人程度

時 間: 9:00~12:45

目 的: 現地(上記の地点)に立ってもらい、そこで繰り広げられた

出来事を聞いてもらいながら歴史やその自然などを肌で感じてもらい、同時に教科書や史料にも



載っていない歴史についても知ってもらおう。

<報告>

1. 関ヶ原町歴史民俗資料館

関ヶ原民俗資料館では、合戦の当時に使われていたものや武将の家紋などを見ることができました。特に、この資料館にある関ヶ原合戦の陣型模型を使った説明は、合戦の様子をイメージしやすく分かりやすく、印象に残りました。参加された方々も、普段見られないこのようなものに感嘆の声を漏らしていました。

そのあと、実際に関ヶ原の現地を歩いて陣場野や石田三成の陣跡、島津義弘陣跡など実際に陣があった場所まで行き、そこであった出来事や兵士の実際の動きなどの話を聞くことができました。

2. 不破関資料館

不破関資料館では、壬申の乱のビデオを見ました。ほかにも土器や当時の建物の模型などを見ることができた。参加者の方々は、模型や土器などに豊かな反応をしめし、本物や実物のすごさを実感していました。

3. 句碑など

散策では、資料館めぐりのほかに句碑などを探索しました。参加者の皆さんと句碑を探し、石に書いてある詩人の詩を読み、その詩の由来を聞きました。

このエクスカージョンを通して、「広くは語られていない歴史」というものが数多くあるのだ、というを知りました。教科書や資料だけでなく、現地散策や語りで歴史を次世代に伝えていくことが大切だと心に強く思いました。

開 会 式

場所: 研修室

司 会: 中澤朋代(松本大学)

●開会挨拶 中澤朋代



●歓迎の挨拶 臼井(関ヶ原青少年自然の家所長)

マムシやどんぐりに熊やカモシカなど、たくさんの自然や動物に囲まれている施設です。発見したら是非私たちに教えてください。これらの自然のほかに、関ヶ原は文化もたくさん眠っている地であり、この関ヶ原を改めて見つめなおしてみてください。



●実行委員長の話 北川健司(エヌエスネット)

4回目にして始めてちゃんとした看板ができました!(笑)「川と山のぎふ自然体験活動の集い」は「岐阜県は自然体験をいっぱいしているのに長野県などに比べて、知られていない。」「メジャーにしていけないといけない。みんなが知り合おう、出会お



う。」という想いから始まりました。1回目は森林文化アカデミーで、2回目は乗鞍青少年自然の家で、3回目は民間施設を使おうということで郡上八幡自然園で行われました。毎回、できるかぎり地元の方々の協力を得ながら地域の自然や文化に注目し、いろいろな体験を盛り込みながら活動してきました。そして、今回は是非西濃で集いを実施したいと思い、それがここ関ヶ原で実現する運びとなりました。

地域には地域の面白さがあり、そこには伝える人が必ずいます。自然体験の中にもそのような人材がいっぱい必要です。この2日間で、参加者同士が積極的に交流し、より深い関係ができるようにしましょう。

基調講演

「これまでの10年、これからの10年」

場所: 研修室

時間: 14:30～14:50

講演者: 田村 明(朝日大学)

目的: 今回の集いそのものの目的である「これまでの活動を振り返る」上での視点や考え方のヒントを提供し、振り返りの準備をする。



<報告>

田村先生による基調講演は、美しいスライドと音楽をバックに始まりました。

まず話は、先生の専門とされている観光の話から始まりました。その中で、「岐阜県の観光は本当に元気なのか?」「岐阜県のすばらしい自然を次世代に受け継げるのか?」という問題提起がなされました。今回の集いは、これまでを振り返り、これからを考えるという目的があり、この投げかけは、まさにこれらを考える入り口となりました。

その後、話題は今の社会情勢に移りました。今の日本経済は、長引く低成長や国家の財源不足などの影響を受けて経済の先行きが不安定であり、このままじっとしては家庭・町・都市の姿が貧しくなり、限界集落や廃村が増えてしまうという指摘がありました。

次に、岐阜県の観光のこれからの話は移っていきました。長良川の鶺鴒いを例に、リピーター確保の必要性和見せ方の変換や経営者の危機意識の啓発の必要性が指摘されました。また、岐阜県の自然体験活動も、資本主義の基本原則である競争を常に念頭に置いて、リピーターを大切にしたり、他とは違った見せ方を工夫するなど、経営戦略を考えていく必要があるという指摘がありました。

そして最後に、今回の集いをきっかけに、それぞれの活動の持つ本当の意味を考え話し合い、美しい川や山を次世代に受け継ぐためにどうすればいいかという課題を共有し、そのための新しい活動を模索し、それをそれぞれの活動に生かして欲しいという言葉で締めくくられました。

岐阜県の観光や自然を守るには、危機意識を持ちながら資本主義の競争原理の中での経営戦略を考えていく必要があります。この集いをきっかけに自分たちの活動の本当の意味を考え、美しい川や山を次世代に受け継ぐにはどうすべきかを考える必要がある、と痛切に感じさせられる基調講演でした。



分科会 1

1. 「ポータルサイト構築に向けて」

場 所: 研修和室

担当者: 北川健司(エヌエスネット)

参加者: 6人

目 的: 「グリーン・ツーリズムのポータルサイトをつくる」。環境教育系の活動をしている団体の情報を発信する見やすいポータルサイトをつくるための具体的な進め方を話し合う。



<報告>

●岐阜県の現状

県が環境教育的な情報の発信をしているポータルサイトが既設されてはいるが、活動内容について詳しく記載されていなかったり、紹介する団体の漏れがあったり、検索機能を使っても見つけづらい見つけにくい、サイトに行き着くまでのリンクが遠いなどの問題があり、有効に使われそうにない。

●実現のために出た課題と解決策

どのような形でホームページを作成するか

- 時間をかけてホームページの完成形を設計して作っていくか、すぐに立ち上げるか
- できるだけ早くページを立ち上げたいため、表紙とバナーを並べるだけの形態に

●情報を集約するために活動団体にどう呼びかけるか

- 今回の集まりで関係者に呼びかける
- 申請書を書いてもらいそれに必要事項を記入してもらい集める

●集めた情報をどうやって集約するか

- ・キーワード検索を行えるようにする
- (例)川遊びで検索したら関連の団体が出てくる
- ・地図を載せてそこからクリックして入れるようにする
- ・説明の文をブログにして団体関係者が自分で更新できるようにする

●予算をどうするか

- ・来年度に向け補助申請をしていないため、県からの予算がおりるとしても再来年度以降になる
- リンクやバナーをつくることで登録料をもらう
- ホテルや民宿などの宿泊施設にも呼びかければかなりの量になる

●団体の審査・サイトの管理はだれがするのか

- ・審査は北川さんが行う
- ・サイトの管理は若い世代に任せる→新しい雇用に繋がるのでは？

●問い合わせのページはつくるか

- ・こんなガイドはないか？こんな遊びをしたいがやっているところはあるか？などの質問が出た場合、だれが答えるか
- メールで直接返すか掲示板で答える
- 返事の方法や返事を書く人などの細かい取り決めはホームページが出来てから

●提案されたこと

- ・それぞれの地域でコーディネーターの人を置く。
- ・はじめは地元で声をかける人のレベルで集める。そこから徐々に募っていく
- ・それぞれの地域にコーディネーターは複数いてもかまわない

●コーディネーターを置く地域の区分

「新穂高・平湯」「恵那山」「大日岳・石徹白」「付知」「御岳」「白山・白川」「高賀山・板取」「能郷白山」「上石津・養老」「春日・伊吹」「山之村・神岡」「流葉・数河」「天生・小鳥」「古川・国府・高山」「位山」「宮・萩原」「馬頼・清見」「下呂・金山・七宗」「美濃」「関」「岐阜」「八百津・美濃加茂・各務原・笠松」「可児・御嵩・土岐・瑞浪・多治見」「上矢作・山岡・明智・岩村」「瑞穂・本巣」「大垣・海津」

●決定事項(これから行うこと)

- ・地域のコーディネーター探し
- ・地域の人的資産の発掘
- ・ホームページの検討・立ち上げ
- ・ホームページに載せる団体の募集をする
- ・希望者に記入シートの配布→200字で団体紹介を記入
- ・審査→通れば千円の対価でホームページに載せる

●当面のページの内容

団体の自己紹介のコーナー

新着情報

リンクとバナー

●次のステップとして

- ・ホームページを通して仕事が発生した場合、報酬が入るようにする
- ・助成金が入るようにする
- ・各団体の情報がブログ形式に更新できるようにする

2. 分科会 「見つめる・見直す 岐阜の水と緑」(~2日目)

場 所: 研修室~ロビー

担当者: 中澤朋代(松本大学)

話題提供者: 成瀬富士一、柴田甫彦(環境市民ネットワークぎふ)

参加者: 1日目: 16人、2日目: 7人

目 的: 自然体験活動を支える原点である自然環境(水と森)の過去と現状、課題を共有し、これからのありかたを考える。



<報告><1日目>

最初に、柴田さんと成瀬さんより、岐阜県の水と森の現状について問題提起をしていただきました。

柴田さんからは、岐阜県のそれぞれの自然の状態について、ご自身が草の根で集めた情報、荒れている自然の状況がレポートされました。また、中京圏のエネルギー需要やそれに関わる水の需要があり、これを解決するために国土交通省が計画を作っているということについてもお話があり、これをどのように考えるかという問題提起がありました。

成瀬さんからは、徳山に沈んだ村の生活文化を受け継ぐために自然学校を開設していくので、みんなでもに運営したいという投げかけがありました。また、岐阜県政の民有林の現状と将来ビジョンの話もありました。

お2人の話を聞き、会場からは「各個人が考えて行動することでダムなどのような大規模なものの必要性を考えないですむようにしたい。」という感想や、国土交通省の計画や岐阜県の国有林も含めた林政などに対する質問などが活発に飛び交いました。

そして、最後にファシリテーターの中澤さんが「お2人から提供された話を踏まえ、自然体験活動がこれらの現状の中でどのような役割を果たすのか、私たちが理解して動く必要がある」としめくりました。

<2日目>

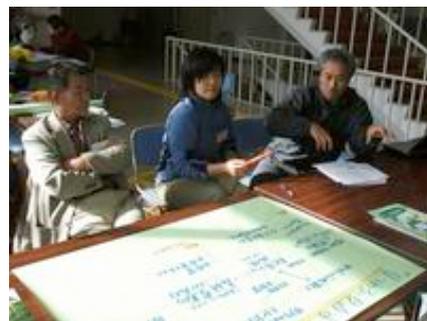
まず、成瀬さんから聞いていた今須の森の現状を現場にて確認し、この森づくりに伝わる技を見ました。その後、フリーディスカッションにて前日から続く岐阜県の水と森の現状について情報交換や討論をしました。

まずは現状整理から入り、岐阜県もとい日本ではもともと林業が成り立っていたが外材の流入という大きなインパクトの影響で現在は問題が山積みになっていると整理しました。

次に、現状を改善するためにどのようにすべきかを考えました。その結果、次のようなことが浮かび上がってきました。

1. まず最初に、環境教育も経済の仕組みの中に入ることが大切であり、環境教育の意義や理念を経済価値換算で説明できるようにし、みんなが分かる共通の価値観を作り出すべき。
2. 林業以外のプラスアルファの価値や技術を伝えていくために、その効果的なやり方を環境教育の考え方を取り入れて考えだし、行政や民間のできることを考えてお互いを理解し、場を作ってこれらを巻き込むべき。
3. 普段の教育の中で、若い者にも政策の話を理解できるような基盤を作るべき。
4. 現場を持つ私たちは、つながりを生み出しながら身近なところから活動を起こし、人を巻き込んでいくべき。
5. NPOと行政の仕事のインタープリターを、大学教授や行政OBにやってもらうべき。

問題提起をしてくださったお二人とも、岐阜県の水と森の現状を知ってほしいという熱い気持ちがひしひしと感じられました。最後のまとめとして、中澤さんから「今回はいろいろな立場の人が集まって話をしたので、有意義な議論ができた」「私たちの集いではこのような多様性が果たして足りているのか？」というまとめと新たな問題提起があり、2日間にわたる分科会は幕を閉じました。



3. 「気まぐれナバの、ちょっとだけインタープリテーション」

場 所: 研修和室～裏の森

担当者: 萩原裕作(岐阜県立森林文化アカデミー)

参加者: 18人

目 的: インタープリテーションの手法のダイジェスト版を体験し、施設周辺の自然素材の見方と効果的な使い方に焦点を絞って話し合い、参加者のそれぞれの活動に生きるネタ作りをする。



<報告>

「まずはお茶でも飲みながら...」とティータイムから始まって、掃除機パイプの楽器やボール転がしで心を引きつけるテクニックを披露。「皆さんがよく知っているものでも、ちょっとやり方を変えると、ちょっと工夫をすると面白いものになるでしょ？」最初にこうやって参加者の心をほぐし、こちらに集中させることが大事なのだそうです。

レクチャーの次は頭と心の準備運動。次々アイデアが浮かぶ頭を養うために2つのゲームを行いました。

1つ目は「山手線ゲーム」。お題は「鍋に入れる具」で、1つの輪になって座り、リズムにのって順番に鍋の具材をあげていきます。最初は3人目で止まってしまうのですが、だんだん調子が出てきて、一周することに成功しました。

次のゲームは、袋の中身を手探りで当てるといふもの。正解はじゃがいもでした。じゃがいもを取り出し「さあ、これを使って何ができるでしょう？」と問いかけて、2チームに分かれて、できるだけたくさんのアイデアを出していきます。「お手玉のように投げて遊ぶ」「バトンの代わりにして、じゃがいもリレー」「生産地をたどる旅なんてどう？」などなど... 1チーム20以上のアイデアが出てきました。このように、特別な材料がなくても、じゃがいも1つでもたくさんのプログラムを生むことが出来ました。

準備運動セッションのしめくりに、これら2つのプログラムを通して参加者にどんなメッセージを伝えることができるかを話し合いました。楽しい時間の演出はもちろん、メッセージをいかに効果的に伝えるか

がインタープリテーション。インタープリテーションは単なる情報伝達ではないのです。

準備運動を終え、いよいよ2人ペアで野外を散策しながらお題にあった素材を探します。今回は「循環を感じるもの」「生きものと植物のつながり」など、メッセージが決まっていますそれに合わせたネタを見つけなければいけません。これはじゃがいもの練習ゲームより難しいです。でも誰かが見つけた素材のヒントについて、みんなでわいわい話していると、どんどんいいネタになっていきます。落ち葉や枯れ木やどんぐりを、どんな風に見せることができるでしょう？一人で考えるよりも2人、3人、いろいろな人のアイデアを組み合わせるといいネタに仕上がっていきます。思ったよりも早く日が陰り、森からの帰り道、コウモリが飛んでいるのを発見！これもネタになりました。

今回はインタープリテーションのダイジェスト版でしたが、「見えるモノを通して見えないメッセージを伝えること。」を体験的に感じる事ができたのではないのでしょうか？

4. 自然体験基礎講座『アイスブレイキング入門』

場 所：施設周辺

担当者：十文字美世子(こうじびら山の家)

参加者：7人

目 的：以降の活動が楽しいものになるかどうかを左右すると
言っても過言ではない「アイスブレイク」のネタを持ち寄り、
やってみる・考える。そして日ごろの疑問・質問を話し合う。



<報告>

最初に、「お互いのニックネーム」と「このテーマ(分科会)を選んだ理由」を参加者全員が発表しました。分科会を選んだ理由としては、「楽しく・注目されたい」「静かに聴いてもらいたい(特に危険リスクの説明時など)」「Good Start をきりたい」「導入部の集中力をえる」「プロの質を高めたい」などがあがりました。

次に、参加者それぞれが持ち寄ったプログラムをみんなで体験してみました。やってみたプログラムの名前は次のとおりです。

- ・「やろーよ・やだやだ」： 声を出す・こころを開く
- ・「葉っぱのめがね」
- ・「葉っぱの顔探し」： 発見をうながす
- ・「シャッター」： 発見と見せようとしたものとのギャップ
- ・「かたたき」： 感性は「いやし」につながる

いろいろなプログラムを体験したあと、その体験から得られた気づきを分かちあいました。

- ・自然には段階的に近づく
- ・思いやる心に気づく(他人だけでなく自分も)
- ・人を楽しませる＝自分も楽しい
- ・おしつけない＝やる気を出させる
- ・いやなことは気づく・共有する

また、アイスブレイクについて次のような質疑応答がありました。

Q. アイスブレイクへの理由付けは必要でしょうか？ アイスブレイクをはじめる前のことばはどんなものがいいでしょうか？

A. まずは、お互いの波長を合わせる、いわゆる「チューニング」のために、と説明します。

Q. 大人への声掛けが難しいです。大人にはどんな距離感でアイスブレイクのプログラムをやればいいのか？

A. まずは、「忙しいのによく来てくれました。」と労をねぎらい、相手を認めるところから入れればいいのでは？

Q. アイスブレイクは楽しいだけでいいのでしょうか？

A. 「環境への意識をノックする」というメッセージをあわせて伝えたいですね。アイスブレイクは自分の殻から出てきてもらう、自分を出してもらうためのルールを作るためにやるもの、ともいえますから。また、その後の活動へ繋がるストーリーを持たせる(たとえばその後グループ活動を重要視した活動があるなら、アイスブレイクでもグループで取り組むものを実施する、など)ことも大切です。

アイスブレイクは自然体験活動の中でよく使われる用語ですが、こうしてあらためて見つめなおしてみると、非常に深いものがその裏には潜んでいることに気づかされる、そんな分科会でした。

基調テーマディスカッション

場 所: 研修室

担 当: 高田 研(都留文化大学)

アシスタント: 中澤朋代(松本大学)、

河野 淳(岐阜県立森林文化アカデミー)

参加者: 自由参加

目 的:

- ・自然体験活動をする人々のつながりは生まれたか？
- ・環境や社会のことを話し合ったことが活動に生かされたか？
- ・県下の自然体験活動に貢献できたか？
- ・自分自身とこの会自体が4年間でどう変わったか？
- ・情報と技術は十分に満たされたか？

という、第一回目から取り組んでいるこの4つ基調テーマについて参加者で反省をしたうえで、川と山のぎふ自然体験活動の集いの今後の展望を具体的な提案を盛り込んで検討する。

<報告>

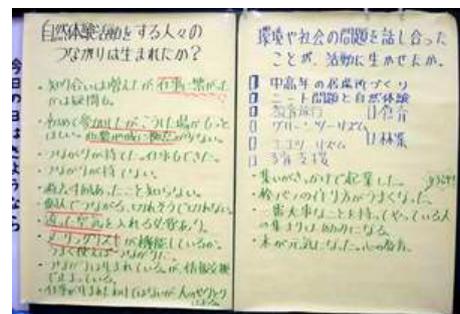
ディスカッションの運営方法は、上記の基調テーマの1つ1つについて、自由参加で集まった参加者が用紙に意見を記入し、その内容をグループで分かちあい、最後に全員で共有するというものです。

1つ目のテーマ『自然体験活動をする人々のつながりは生まれたか？』では、「知り合いは確かに増えたが、実際に仕事という面で見たとときその仲間が増えたか」という疑問「つながりを持てたからここにいる。仕事の関係も。顔は知っているけれど、その次のステップに行かない」「まだどっちとは判断できない。人材紹介では機能しているのでは？」などの意見が出ました。

2つ目のテーマは『環境や社会のことを話し合ったことが活動に生かされたか？』。今まで取り組んだテーマを回想しながら話していくうちに、「ここでできた仲間に教えられた棒パンのスキルが役に立っている」など、具体的なエピソードもあがりました。

3つ目のテーマは『情報と技術は十分に満たされたか？』。「同業者を知ったことで、問題意識が生まれ、自分にできることを考えるようになった。」「他人の情報を得るだけでなく、自分ももっと情報を発信したい」「発想の転換になり、集まることで情報が発展した」などの前向きな意見が多く出ました。

最後のテーマは『県下の自然体験活動に貢献できたか？』。自分自身とこの会自体が4年間でどう変わったかを見直そうというものです。ここでは「自然体験活動自体は把握しきれないが、きっと広がっているだろう。この活動が役に立っているという実感はまだない」「会に触発されて、何らかの1歩にはなっている。メーリングリストがいまひとつ活用されてない」「貢献は十分できているのでは？」さまざまな分野・場所で活動している人がつながれた。巻き込み巻き込まれ、活動が広がった」など、賛否両論で今後の課題が見えてきました。



団体紹介

場 所: 研修室

担当者: 八尾哲史(岐阜県立森林文化アカデミー)

紹介者: 6人

参加者: 自由参加

目 的: 県内で活動されている元気な団体の事例を共有し、それぞれの活動の参考とする。紹介する団体にとっては、情報発信の場ともなる。

■どんぐりの森実行委員会(窪田一仁)

- ・活動紹介のビデオを上映
- ・クワガタが棲むことができるどんぐりの森作り
- ・クラフト(リース作り、木の実やかやのクラフト、野鳥バッチ作り、巣箱、エサ台作り)
- ・体験(どんぐり茶・ケーキの試食、自然薯堀、とろろそば作り体験、いも煮会)
- ・公園内での観察会
- ・ユニークな選手権の開催(どんぐりゴマ選手権、柿の皮剥き競走)



■おっぱら夢組合(上村智彦)

- ・平成13年におっぱら自然体験センターの管理者となる(高山市から受託)
- ・村祭り体験、収穫体験、散策会などを実施
- ・体育館を利用してバレーの合宿利用などもある。



■岐阜県ネイチャーゲーム協会(原 令子)

- ・東濃を拠点に、岐阜県内各地でネイチャーゲームの普及にあたっている。
- ・平成20年6月13~15日、乗鞍青少年交流の家でネイチャーゲームの指導者育成会を実施する予定
- ・2日目の朝のモーニングプログラムの実施の告知あり



■東濃自然観察連絡会(山本喜美江)

- ・2年前から観察会を通算12回実施
- ・観察会では様々な専門家を呼んできている(参加費は300円)
- ・グリーンピア恵那の跡地で森づくり
- ・1年前に森づくり審査員

■こうじびら山の家(十文字美世子)

- ・NPO 法人として 2007 年9月 18 日に登記したところ
- ・明宝地区に活動拠点を設置、もともとキャンプ場だった場所を格安で譲り受けた。
- ・都会と農村の交流と田舎に力を取り戻すことを目的としている。



■水門川いきいきプロジェクト(伊藤允人)

- ・大垣市環境市民会議の一部会
- ・水門川:内水河川(=源流をもたない川のこと)、水質はDランク
- ・上流~下流まで 12.1km
- ・プロジェクトの目的:ホタルが舞い、ハリヨが泳ぐ川になること
- ・川の健康診断員制度→講座あり1月から開始5日間で3ヶ月で10単位各2時間ずつ



■山菜の里いび(小寺春樹)

- ・今年3月に団体がスタート(奥さんとともに)、17名で発足
- ・山菜とブルーベリーを植える
- ・山菜植え体験と自然観察
- ・ボランティアを募っている(3月からの草取りなど)



オプション 「アダルト禁止、学生だけの集い」

場 所:ロビー

参加者:18人

目 的:

- ・今回の集いをきっかけに、学生や若者同志の交流を図る。
- ・この集いに参加したもの同士で情報交換などができるように、その手段を作る。

<報告>

まずは参加者全員、自己紹介をしました。A4用紙を4つ折りにして、下の内容を端的に書いてもらい、各自これを基にして自分のことを紹介してもらいました。

1. ニックネーム(私は、こう呼ばれたい)
2. 所属(どんな学校? どんな組織?)
3. 趣味(文章じゃなくて、キーワードで)
4. 私はこんなことに興味があります(キーワードで) or 勉強していること

まじめな紹介有り、面白い紹介あり、中にはパフォーマンスつきの紹介(けん玉の技の凄かったこと!)をあり、と会場は大いに盛り上がりました。一方向な自己紹介ではなく、感嘆の声やツッコミなども飛び交い、和気藹々とした雰囲気でした。



このつながりを今後も残していきたいということで、この集いの参加者名簿を作り、この春3月に森林文化アカデミーにて開催予定の『環境教育を考える学生の集い(仮)』の紹介などの情報交換をしました。最後の『環境教育を考える学生の集い(仮)』の話では、(若手でもないのになぜか参加していた)中澤さんより「ここに集まったみんなで何か一つの分科会か交流会を企画させてもらったらどうか？」という提案もあり、是非やってみよう前向きな姿勢になり、次につながる形ができたと思っています。

《 2 日 目 》

オプション **朝のネイチャーゲーム体験会**

場 所:施設周辺

担当者:原 令子(岐阜県ネイチャーゲーム協会)

参加者:12 人

時 間:7:00~8:00

< 報告 >

1日目夜の団体紹介で突如発表された朝のオプションメニュー「ネイチャーゲーム体験」。前の晩、遅くまで交流していた人が多かったにも関わらず、12 人のメンバーが正面玄関前に集いました。

原さんが実施されたのは『自然の紋』というもの。まず、駐車場に掛かっている戦国時代の合戦で使われたのぼりを見るように促されました。関ヶ原の合戦で扱われた各武将の家紋の多くは、植物や生物をモチーフにしたもの。『紋をつくる専用のシート』が配られ、そのシートを使い各自自由に動いて、自然の形をモチーフにした自分だけの紋を作っていました。

最後に、全員で集合して各々が作った自分の紋を見せ合い、これは自然の何をイメージしたものかを発表しました。「パンジーの花」「シカ、イノシシの足跡」「木の芽」「真上から見たアジサイ」などなど、いろいろなものがモチーフとして採用されていました。

このプログラムのねらいは、『参加者に、自分が見つけたものを細かいところまで観察させる』ことにあるそうです。参加者からは「各自で紋を描いている最中は、凝った作りにしようとする人がとても多く、見た限りでは参加者全員が熱中していて、とても楽しんでいた」「自分たちがつくったものを発表するときは『次はどんなものが出てくるのか』という楽しみが全員の間に入り、非常に和やかな雰囲気での発表だった」「終わってからもプログラムについてあれこれ話す人たちがいた」などの感想が聞かれました。

このプログラムは、通常 of 自然観察よりも観察の対象をより細部まで見させることができていました。原さんの司会が上手く、全員の意見がちゃんと拾えており、不完全燃焼を起こす人がいなかった点も素晴らしいと思います。



分科会 2

1. 「今須の森づくりから学ぶ」

場 所:前の檜林

担当者:川尻秀樹(森林インストラクター岐阜)

ゲスト:山本晃治

参加者:16 人

目 的:今須林業の択抜林を維持するために発達した枝打ちの技術を職人から直接教わり、ぶり縄による木登りを体験することを通して、西濃の自然と人の文化を学ぶ。



<報告>

最初に、川尻さんから今須林業の特徴が紹介されました。日本の一般的な林業は皆伐によってできる樹高や樹齢が均一な一斉林なのに対し、今須の林業は択伐を行うことによって複層林を維持していくという特有の林業形態を取っています。そのために発達したのが枝打ちの技術です。この技術は今や全国的に知れ渡っていますが、西濃の今須林業が発祥とされて、今須にはこの枝打ちを専門に行う職人がいて、今回のゲストの山本さんはその中の1人です。

次に、山本さんから「鉈(ナタ)」と「ぶり縄」と「ふじはばき」の説明がありました。ぶり縄は枝を払うために20m前後のロープと50cm長の丸枝を組み合わせただけの道具で、これを使うとどんな太さの木にも自由自在に登ることができます。鉈は木の上の不自由な場所でも枝打ちができるように両刃のものを使います。そして、ひざ下に巻く滑り止めがふじはばきです。これがあれば、ロープなしで木の上から一気に滑り降りることができます。これらが、今須の枝打ちに欠かせない道具で、職人さんの手入れが施されています。

説明のあと、いよいよ森へ入って、1番の目玉である「ぶり縄体験」をしました。山本さんの見事なお手本のあと、参加者ひとり一人が実践。参加者に自然体験に携わる人やツリークライミングの指導者が多かったせいか、物怖じせずにも続々と登り、盛り上がりました。伝統的な林業技術を目の前で躍動感たっぷりに見ることができたことに満足した参加者が多かったようです。

体験のあとは、伝承にまつわる貴重な話や、質問などのフリートークの時間となりました。山本さんのお父さんも今須では指折りの枝打ち職人で、数々の武勇伝を残しています。道具の仕組みや使い方、ディテールの説明まで、林業には素人の参加者に対しても丁寧に教えてくれました。どんどん話は発展して、最後は鷹の代替巣のことにまで話が及びました。森をよく知っているから、鷹の専門家でなくてもわかることなのでしょう。森づくりは単なる木材の生産というだけではなく、自然とのつながりの文化が育っていくところなのです。

全体を通して、今須の林業を担う人の技と言葉、息使いを間近で体感できる貴重な体験となりました。これが西濃の人と自然の文化の歩みではないでしょうか？

3. 自然体験基礎講座『身近な自然見直しプログラム作り』

場 所: 施設周辺

担当者: 猪俣 寛(河川環境楽園 自然発見館)

参加者: 10人

目 的: 私たちの住む身近な場所にも自然が存在し、多くの生きものがある。そんな自然に気づく自然体験プログラムを参加者で作り実施し、デザインのノウハウや運営についてを学ぶ。



<報告>

最初に猪俣さんから「まずは子どもになった気持ち、小学校4年生にみなさん、なってください」との一言。参加者はみな「子ども(の気持ち)」になって活動に取り組みました。

まずは、『五感を使って「見る」』活動です。たとえば『「手」で見る』では、袋の中にある葉っぱを手で触り、それと同じものを机上の3枚の葉っぱの中から選ぶ、という活動を体験しました。手でもかなりの状態による違いに気づくことができました。

参加者が目をつぶっている間に、指導者が身につけている物を少しばかり変えてみて、どこが変わったのかを指摘するゲームなども体験してみました。実際にこのゲームはアイスブレイクの機能をも兼ね備えた、すぐれたゲームで面白かったです。

つぎに、『いつでもどこでも「野生生物探し」』という活動に取り組みました。場所は一階ロビー。つまり屋内です。この中にある野生生物を探す、というもので最初は「そんなにいるかなあ」とみな思いつつスタートし始めましたが、じっくり見るといることいること。多くの生物そのもの、もしくはその痕跡があったことに

一堂驚きました。発見されたものを具体的に挙げると…

窓ぎわの小昆虫の死骸、花瓶の菊の葉の虫食い跡、クモの巣、ツバメの巣、ゴキブリの糞、天井にヤンマの死体が などなど…

最後には、『主観ビンゴ』という活動をしました。場所は池の回り。あくまでも主観で、かつ、小学校4年生の感覚で取り組みます。おのおのが、マスが書かれたビンゴの用紙に番号を打ち、自然を素材にした3択問題を作ります。さらにお互いに問題を出し合い、その内容が発見でき列が揃うと「ビンゴ！」になるのです。みな、子どもの気持ちになってゆったりたのしく取り組みました。

最後に、まとめとして猪俣さんから、「プログラムをする側の「思い」が何であるかを明確にし、その「達成」に向けてプログラムを組み立てよう」「ちょっと「視点」を変えると、身近な自然を見直すプログラムができる」などの話がありました。

4. 「自然体験は地域に役立つ！」

場 所: 研修室

担当者: 窪田一仁(ドンダリの森実行委員会)

千葉(メタセコイアの森の仲間たち)

参加者: 12 人

目 的: 大垣市で活動しているドンダリの森実行委員会やハリコネットワークの活動事例を通して、地域に役立つ自然体験活動とは何か、意見を交換し、参加者それぞれの活動に還元していく。



<報告>

●まず、西濃地域で活動されている2つの自然体験活動団体から、活動の紹介をしていただきました。

“ハリコネットワーク”

・1991年に「ハリヨ」に関心のある団体、方々がハリヨを保護する目的のもと集まり結成したネットワーク

・ハリヨ(ハリコ)について

トゲウオ科に分類される魚(ハリコは地域特有の呼び名)。滋賀県と岐阜県西濃地方に現在生息しており、湧水のある川にしか生息できない。

・これまでの活動の紹介

ハリコに関するイベント、フォーラムの開催。地域の学校教育としても取り入れられる。

・質問タイム

Q: ネットワークとしてつながりのある人たちと年に何回集まっているのか？

A: 定期的に集まるというものは無く、思いつきで機会を設けている。

“どんぐりの森実行委員会”

・野鳥の会が中心となり、自然観察指導員などの団体の集合体できた。自然観察会をはじめ、さまざまなことに取り組もうといろいろな団体に声かけをして、みんなの好きなクワガタをテーマに入れ、クワガタの住めるどんぐりの森づくりを、という流れになった。

・どんぐりの森での主な活動の紹介

クラフト(リース作り、木の実やかヤのクラフト、野鳥バッチ作り、巣箱、エサ台作り)

体験(どんぐり茶・ケーキの試食、自然薯堀り、とろろそば作り体験、いも煮会)

公園内での観察会

選手権の開催(どんぐりゴマ選手権、柿の皮剥き競走)

●次に、参加者全員で、それぞれの活動の共通点、相違点を考えました。

(共通点)

・活動の目的

この2つの団体は、ハリコの住める環境づくりとクワガタの住める環境づくりが目的ということで、活動

の目的は似ている。

(相違点)

・活動の対象(素材)になるもので活動の内容が違ってくる

どんぐりの森の活動では観察の対象となるものに気軽に触れることができる、ハリコネットワークの活動では実際に対象(ハリコ)に触ることは出来ない。

・活動の範囲

どんぐりの森は活動がその公園に限られているが、ハリコネットワークではハリコが生息している地域ならそのすべてが活動範囲になる。

●続いて、西濃以外の地域で活動している2つの団体の活動紹介がありました。

“パスカル清見”

・活動内容

ただペンションの経営をするだけではなく、他との差別化として都市から来たスタッフに着目して、都会から来た人向けのプログラムの考案(都会から離れる入門編としてのプログラム)。そして地域の人にお金を払い協力してもらい、さらにそれによってより多くのお客さんを呼ぶことで地域に貢献する。

“ネイチャーグレース”

・個人的に山歩きや自然が好きな人が集まってできた NPO 法人

・主な活動は自然観察会(乗鞍、西穂高、上高地などのガイド)

○質問タイム

Q:案内(ガイド)はどうやって呼んでいるのか?

A:会員の中でその場所に詳しい人がボランティアでやってくれている。自分たちも何度も研修など行いスキルを高めている。(ネイチャーグレース)

Q:活動のメインとしている対象は?

A:小中学生。今の子供は自然のことを進んで好きになろうとしない。そこをなんとかしたい。(パスカル清見)

A:地域の外から来る人。外から来る人に自分たちの地域の自然を好きになってもらうことで、地域を守っていく。(ネイチャーグレース)

●参加者の感想・意見

・大人向けのハイレベルなプログラムを考案したらどうか

・参加する人も活動を行う人も楽しんでやれるプログラムを考えていきたい

・地に足がついた活動をしていきたい

・共通・相違点を探るところで、どちらも純粋な気持ちでスタートしたのにコンセプトやスタンスにやはり違いが出てくるのだと思った

・単発で来るお客さんが多いため、リピーターを増やしていけるようにしたい。ここで知ったことを続けていくのがお互いの目的になるのではないか

・多くの人を上手に巻き込む運動がすごいと感じた

・ほかとの差別化が必要だと感じた

5. ネイチャークラフト入門 ～「結び灯台」づくり～

場 所:クラフト室

担当者:入江鐵夫(行灯工房)

参加者:5人

目 的:ものづくりを通して行灯を使っていた時代の文化に触れる。作業を通して、木の性質や道具の使い方について学ぶ。こうした流れを通して、自然体験活動プログラムとしてのものづくりの可能性を感じる。



<報告>

●作業行程

- 1: 結び灯台の歴史について入江さんからお話を伺い、結び行灯に関する理解と関心を深める。
- 2: 今回の行灯作りの要となる三脚制作の使用樹種であるスギについての説明と、その製材について木の性質の面から詳しく伺う。
- 3: 作業の開始。材の長さの調節や、カンナや紙ヤスリを使った見た目の成形を行う。

[作業のポイント]

- ・材の角をできる限りとり丸みのある棒に仕上げること。
- ・立てたときに上に行くほど細くなって行くようにすること。

- 4: 組み立て作業。「おとこむすび」という特殊な結び方を用いて三脚を安定させ、上に和ろうそく付きのお皿を乗せて完成となった。

[作業ポイント]

- ・三脚を組み立てたときの底辺ができる限り正三角形になるようにすること。

●参加者の様子

参加者のみなさんはそれぞれとても楽しそうに、かつ真剣に、作業に取り組まれていました。スギ材を成形するところでは、それぞれ満足がいくまで削り続け、会話や休憩をすることを忘れるほどでした。

一番苦労していたのは「おとこむすび」という特殊な結びで、底辺を正三角形に保ちながら結ぶことにみな大苦戦。何度も何度もチャレンジしながらこの特殊な結びを習得していきました。

最後に完成した行灯に火をともしたときは、参加者全員が自分の作品に感動した様子でした。

全体会

場 所: 研修室

担 当: 中澤朋代(松本大学)、

八尾哲史(岐阜県立森林文化アカデミー)

目 的:

- ・この2日間に、この集いではどのようなことをやったのかを全体で共有する。
- ・川と山のぎふ自然体験活動の集いの課題を明らかにした基調テーマディスカッションを受けて、私たちが今後取り組むべきことを考える。

<報告>

今回の集いの最後を飾る全体会では、この2日間の活動報告と今後の方向性を確認するワークショップを行いました。そして、挙げた提案に関しての確認では収まらずに、「いつまでに、何をやるか」という具体的なところまで話が及び、各個人各団体たくさんの宿題を持ち帰ることになりました。

まずはじめに、各分科会に参加された方々に、活動内容を報告していただきました。エクスカージョンと分科会は、合わせて11の活動が実施されましたが、どの分科会の参加者も、新しい発見や感動があったとの発表があり、有意義なものであったことが伺えました。

続いて行われた今後の活動を考えるワークショップでは、参加者からすばらしい意見や提案がたくさん出されました。以下、箇条書きではありますがいくつかの意見や提案を紹介いたします。

<今までの活動について>

●情報&技術は満たされましたか?

- ・伝える人がこんなに居る!!という情報が入りました。



- ・情報提供から発展するものが有りました。
- ・ホームページなどで共有できれば、活用できると思います。

●県下の自然体験活動に貢献できていますか？

- ・ニーズの汲み取りが大切だと思います。
- ・人脈の広がりから、期待が膨らみます。

●これからのこの集いについて

- ・そもそも、この集いが過去にも4回あったことをしりませんでした。
- ・メーリングリストが使いづらいので、何とかしたほうがいいと思います。
- ・人と人が結びつけば、ネットワークが勝手に広がっていくのではないですか？
- ・自然体験のポータルサイトを作成したらどうですか？
- ・どこに行ったら何ができるか分からない。そのような情報がほしい。
- ・どんな小さな森もインタープリテーションの人が居ます。海外の方に伝えるには？
- ・行事があまりないので、お互いにつながりを深め合う機会がないのではないかと？
- ・活動をしている人たちの出会いの場や人材交流の場がほしい。
- ・活動や情報の拠点がほしい。
- ・子供たちのことも考えて、30年先を見据えることが必要ではないでしょうか？

← 小学校に自分たちのプログラムを持っていけたら、様々なメッセージを伝えることが出来ると思います。

- ・自分たちから啓発し、活動することが大切だと思います。
- ・ネットワークの拡大について、「ねずみ構作戦」を実施してはどうでしょうか？
→ 参加した人が友達に出来事を話し、友達がまた話しをして仲間を増やしていきましょう。
- ・おじいちゃん達が持っている目に見えない技術などを残すために、その間をつなぐ人を作ることが大切だと思います。
- ・身近な自然の中から「不思議」を発見するところから、子どもなどの興味を引いていく。このような活動が大切だと思います。
- ・森林文化アカデミーにある森林サポートセンターという新しく出来た拠点をどんどん活用しましょう。

●決まったこと

1. 今回の参加者で「ねずみ講作戦」
 2. 「田舎の知恵、お年寄りの知恵」を是非来年の分科会でやりましょう。
 3. 地域に常設の拠点を作ります。早速できそうです。
 4. 小学校の体験活動に使えるネタ探しを、チーム西濃がやります。
 5. ポータルサイトを来年4月までに完成させます。2月までに原稿をください。1,000円程度の入力料をもらうのでよろしくお願いします。さらに、各地域の地域コーディネーターやお手伝いを募集します。
- ・人材バンクは、次回の集いの分科会で議論しましょう。
 - ・発言しやすい新たなメーリングリストを作りましょう。

